奇譚　伊藤晴雨伝
昭和四十七年八月十五日初版発行

著者　団　鬼六
挿画　江村完児
発行　譚奇会
発売　三崎書房
東京都千代田区三崎町二ノ十五ノ十一
振替東京一四五〇九　電話(二六二)三八八六
定価　七百円

晴雨物語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

○

お里が、亭主を嫌って逃げ出したというだけならともかく、逃げこんだ先が、日報新聞、編集長、田所健作の所だと知ると、さすがの進吉も一瞬、気が遠くなりかけた。進吉自身が日報新聞の月給九円の臨時社員—その月給九円というのは、新聞小説の挿画が一枚二〇銭（これが彼の仕事であったが）他に演劇批評の原稿も書き、この掲載料が一回十銭で年中無休故、それで合計九円という事になるわけだが——つまり、進吉は、田所にこき使われている身分だ。上役に妻を奪われたという不自然な腹立たしさ、同時にそれは進吉にとって生命源を断ち切られたような衝撃であった。

その信じられない事がやっぱり事実であるとはっきり判明したのは、お里が進吉の留守を狙い置手紙を残して家出した翌日である。自棄酒と寝不足で土色になったぼそんとした顔で進吉が新聞社へ出勤すると、編集長の田所が彼を呼んで近くのうどん屋に連れて行き「君の細君は僕の庇護を求めて来たんだ」という云い方で、しかし何時頃から進

吉の女房と出来合っていたかは告白せず、また、部下の妻を奪ったなどというしろめたさは微塵も顔に見せず、むしろ大変な迷惑を蒙ったような調子で「君は自分の細君に何か悪趣味を発揮したそうじゃないか。そりゃ細君が逃げ出すのは無理ないよ」と憤慨して進吉を非難するのであった。「君の細君は、僕が保護する事にした。いいね」と、田所は得々とした顔つきで云った。人の女房を奪った話合いにしては、あまりにも人を食い過ぎていると進吉は涙が出る程、腹が立ったが、田所の横柄さに威圧された形で云いたい事の半分も云えなかったのである。また、来るべき時がやっぱりきたという諦めもあった。考えれば、逃げたお里と田所との付き合いは亭主の自分よりも長いのである。

もとお里は、浅草の小料理屋「菊水」で働いていた仲居であり、田所はその店の常連の一人であった。進吉は浅草を歩いて、丁稚奉行していた頃の仲間と偶然出会い、誘われて「菊水」へ飲みに出かけた事がお里と知り合った動機であったが、進吉は色白で上背のあるお里にいわゆる一眼惚れ、もう次の日から一人で菊水へ通うようになった。浮世絵画家というのが進吉の表向きの職業であったが、無論、それだけでは食っていけ

ず、芝居小屋の看板かき、仕事のない時は風呂場の看板かきなどにもかり出されて生活はかなり苦しく、しかし、お里にはかなりの祝儀をはずんだ。勿論、進吉には下心があり、熱心にお里を口説くのだったが、口説くといっても他の酔客のそれとは違い自分の絵のモデルになってくれ、と異常なばかりの熱心さなのだ。どんなモデルをするのさ、と聞いて、キリキリ縛られた女が、折檻され、苦悶する姿、と聞かされたお里は、冗談じゃないよ、別に悪事もしないのにどうして、あんたに折檻されなきゃならないのさ、と、笑いつつ、適当に受け流し、奇妙な絵かきもいるもんだ、と仲間の仲居達に話し笑っていたけれども、毎夜通って来る進吉に同じ事ばかりくり返されている内ふと、その一途さに心ひかれて、じゃ、一回だけよ、とモデルを承知した時は、進吉と肉体の関係が出来る事をお里は暗々裡に諒承したのだろう。あんたを縄でキリキリ縛りあげるけれど、自由を奪ったあんたに対し、不埒な行動に出る下心は毛頭ない、責められ、苦痛を嚙みしめる女体の悶えを描き、残酷破壊の美を出してみたいなどと調子のいい事を云ってるが、所詮、男とはどのようなものなのか、長年、水商売の垢に染まったお里には男性に対する常識といったものがある。

店が看板になるまで飲んで粘った進吉が、泥酔に近い状態のお里の肩に手をかけ、上り框を入れてたった三間しかない長屋つづきの家に連れこんだのは、「菊水」へ通い始めて一カ月たった頃であった。その夜のお里は、何か自棄になったように宵の口から店で飲みつづけ、朋輩の仲居に当ったり、店の土間の白木の卓で、相変わらず猫背になってちびりちびり盃を口へ運んでいる進吉にどんと体をぶつけて来たり、散々、手古ずらせて「私しゃ妻子のある男に惚れちまったのよ。何て間抜けなんだろ」と自嘲的に高笑いするのだったが、その妻子のある男というのが田所だったという事は、その時の進吉はまだ知らなかった。

「さあ、モデルにするなり、酒の肴にするなり、どうとも勝手にやっとくれ」と、進吉の薄暗い家へ上りこんだお里は、酔った体をフラフラ動かしながら、帯や腰紐をキューキューと音をさせて次から次へと解いていき、緋の長襦袢姿になると、畳の上に絵筆を揃え、妙にそわそわしている進吉に、よろよろとくずれかかり、そのまま畳の上へひっくり返ると、鼾をかき出した。どうした、しっかりしろと、半分うろたえて、女を抱き起こすと、キラリと進吉に向けたお里の酒気を含んだ瞳は、ぞっとする程、妖艶で、

しかもメラメラと燃え上るように挑みかかり、その妖気に当てられた進吉は、カッと血の色を浮かべ、もう矢も楯もたまらず、お里を突き離して押入れから荷造り用の麻縄を取出すと、飢えた獣のような素早さで彼女をキリキリ後手に縛り上げたのだ。と同時に、進吉は、お里の襟元に手をかけ、三度四度激しく揺さぶると、お里の日本髪はがっくりくずれて、おくれ毛が肩もとまでバラリと垂れ下がる。くずれた髷を見ると、進吉は、稲妻を感じたように全身が慄え、次にこみ上って来た嗜虐的な陶酔にもう押さえがきかず、お里の長襦袢の襟元を大きくはだけさせて、その襟を押さえて壁の所まで引きずって行きその場に引き据えた。今までに進吉は写真店の主人に頼んで、美術学校などに出入りしている職業モデルを二度ばかり使った事があったが、彼女達は、進吉が発作的にこうした狂暴性を発揮すると、金切声をあげ気狂い、とか変態男、とかわめき散らして逆上するのだが、そして二度と進吉のモデルになろうとはしなかったが、その夜のお里は、正に掘り出し物であった。酔ってもいたし、何かヤケにもなっていたが、髪を無惨にくずされようと、乳房をあらわにされようと、ただ進吉にされるがままで、そんなお里の長襦袢の裾前まではだけさせ、うずら縮緬の蹴出しをすり切れた畳の上にさっと流

させて、ぐいとお里の首を上へ持ち上げた進吉は、肩のあたりのおくれ毛をつかみ、お里の口に咥えさせるのだった。「恨めしげに、もっと恨めしげにこっちを見て」進吉はそうしてお里に好みのポーズをつけると、悦びに慄える手で絵筆を取り上げた。何かをじっと思いつめているのか、すっかり放心してしまったのか、お里は涙まで滲ませて切長の瞳を、せかせかと筆を動かす進吉に向けるのである。

やはり、それですむわけはなかった。進吉のそうした女体の無残絵を描こうとする激しい衝動は、裏を返せば女体の無残図に激しい欲望を感ずる事に通じるらしい。仕事をすませた進吉は、緊縛されたまま引き据えられ、おくれ毛を噛みしめながらぐったりと疲労しているお里の傍に吸い寄せられて行き、ぴったりと取りすがると、お里の胸に顔を埋め、おいおいと泣き出した。そんな進吉をなだめるように お里は云った。「いいのよ好きなようになさいな」進吉は、お里の緊縛された熟れた肉体にひしと取りすがり、火のように燃えさかった——。

それが、きっかけとなって、二人は世帯を持つ事になったわけだが、勿論、進吉の収入だけではやっていけぬのでお里は同じ店の勤めはつづけた。相変わらず、店でお里は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

売れっ子だったが、進吉の方は仕事をしくじる事が多くなった。つまり、進吉はお里に溺れ切り片時も離れたくないといった気持からで、夜になれば生活のためお里は店へ出なければならず、お里と一緒にいる事が出来る昼間の間は、看板屋の仕事が来ても、口実を作って進吉は拒絶し、注文する側の受けが段々と悪くなったのだ。しかし、お里は、そんな事には無頓着、ただし、愛欲行為には貪欲といった風な女で、更に、肉体にからみつく縄の感触を悦ぶというマゾヒストであり、進吉との情事は、ふと毛穴から血が飛び出すばかりにまるで、やけくそになっている。そんな女だから、進吉は惚れて惚れて惚れ抜いて、そして、何かにとり憑かれたよう必死な思いでお里をモデルにし、絵をかくのであった。

「そんな変な絵ばかりかいていたって買手があるわけじゃなし、あんたって妙な人だよ。全く」と、お里は進吉のあまりの熱心さに呆きれて、毒づく時もあったが、その責め絵をかく時の進吉の何か挑みかかるような真剣な眼つきを見ると、ふと胸がうずいて来たりして、モデルにされる事を拒む事はなかった。

進吉の絵の仕事が終わったあとには、お里の卵の白身のようにつややかな肌には、き

まって、くっきりと縄の跡がつき、進吉は、半分、ベソをかき、「すまねえ事したな、許してくれろよ」と、しきりに濡れ手拭でお里の肌をふきながら、女の肌が荒れないようにと気を配る。一時の興奮がおさまると、そんな風に人間が変わって優しくなる進吉を、お里はしみじみ可愛いい人と思うのだ。そして、一旦、切れた筈の田所と最近またよりが戻って進吉の眼をかすめて逢う瀬を続けている自分の罪恐しさを思うのだった。

ある夏のむし暑い昼下がり、地方を廻る芝居一座の絵看板を頼みに来た松吉という男が進吉の所へ来て、ごの暑いのに表戸も窓もしめ切ってあるのを不審に思い、裏へ廻って雨戸の間から中をのぞくと、畳の上へ落ちている青い蚊帳の上へお里が縛られた熱い裸を転げ廻し、悲鳴をあげてのたうっている。松吉は仰天した。口に絵筆を咥え、手に蠟燭を持ち、お里を追い廻しているのは進吉で、悪鬼のような形相になって、全裸のお里の上から蠟燭の滴(しずく)を落しているのだ。進吉が女房を責め殺そうとしている、と直感し、真っ青になった松吉は、大声をあげて近所の人達の救援を求め、声を聞いてかけつけて来た長屋の住人達と一緒に雨戸を突き破り、気でも狂ったか、とばかり進吉を取り押え恰好がつかなくなって、緊縛された裸身のまま台所へ突っ走り、ガタガタ慄えているお

里に袖で眼を覆いながら近寄って縄を解くのであった。「どんな事情があったのか知らねえが女房を責め殺そうなんてとんでもねえ野郎だ」と力自慢の大工や土工達が寄ってたかって今度は進吉を縛り上げ、ポカリと頭をなぐる奴までいて、これは夫婦のざれ事だ、と進吉がいくらわめいても仲々とり合わなかったが、机の抽出しや押入れの中から進吉のかいた残酷絵数十枚が出て来ると、一同顔を見合わして奇妙な顔になり、こういう奇怪な絵をかく商売もあるものかと一応納得して、進吉の縄を解き「こりゃ、とんだ事しちまって」と皆はペコペコ頭を下げ、コソコソ引揚げて行った。

女房の裸を見られただけでなく、女房をモデルにした淫猥な肢態とも受取れる責め絵を近所の者達に見られてしまい、進吉もお里も腹立たしいやら情けないやら頭からバケツでもかぶりたい気持で何日か過ごすうち、急に里子は吐き気を催した。妊娠しなのだ。

生まれたのは女の子で、甲州街道の蟠ガ谷で近所の餓鬼大将相手に駄菓子屋をやっている進吉の叔父夫婦に預ける事にした。水商売しているお前の女房が子供を抱えていては何かとやりにくかろうと元警察柔道指南という肩書きをいばる叔父は顎髭をしごきな

がら思いやりのある所を示したが、月二円の赤ン坊の養育費は必ず捻出せよ、と如何にも警察官くずれらしい鋭い眼つきを見せた。

週に二回、夫婦揃って幡ガ谷に赤ン坊の顔を見に行くのが楽しみであった。しかし、一児の父親となったのに、こう何時までもぶらぶらしていては情けないと進吉は考え、以前、注文を受けていた看板屋、提灯屋、版画家などに仕事探しに廻ったが、例の一件——白昼女房に責め折檻を加え、その苦悶の図を絵に描いていた——という噂は昔の得意先の方にまで拡まって、進吉が顔を見せると、相手は妙に白々しく、何か進吉を気味悪がる風だったから、進吉はやり切れない思いで、家でしょんぼり障子紙など張る事になる。それをまた見るのが辛くて、お里は「あんた、どんな仕事が一番やってみたいのよ」と進吉に聞くと、やってみたいのはやっぱり責め絵だ、などとはさすがに云えないから、進吉は、一層、しょんぼりして見せて、新聞か雑誌の小説挿画がかいてみたい、というのだった。となると、日報新聞の編集長をやっている田所に頼むのが一番だとお里は思うものの、姦通の相手の男に亭主の仕事を頼むというのは、どうも気がとがめる。だが、考えてみれば、田所とは、進吉と知り合う前から体を濡らし合った間柄だし

こうした時は割り切って兄貴にでも相談する気になればいいのだと、或夜、店がひけて、二人の逢引場になっている隅田川近くの旅館の二階で、互に情念のしたたりを満喫し合った後、田所に相談を持ちかけてみた。ああ、いいとも、とあっさり引受けた田所は、それにしても奇妙な恋仲もあるものだと自分とお里の間を振り返ってみる。十九の年で女にしてやった女は、やがて亭主を持ち、その子供まで作ったが、しかし、なお、くされ縁というのか自分と彼女との情事は、このように延長している。それだけ、彼女の肉体に妖しい魅力があったという事になるが最近、ことに子供が出来てからの彼女は、ますます肌に脂がのって、からみついて来る時の手ごたえも粘っこい。顴骨が出っ張った痩せすぎのガリガリした感触の女房を持つ田所は、やはり、この女は絶体に手離せないと思うのだった。「亭主なんぞ持って何も苦労することなかろうに」と、田所が笑いでもすれば「何いってんのさ。私しゃあんたに復讐するため亭主を持ったんだからね」とお里は忽ち逆襲し、妻子のあるのを隠して、私をここまで引きずって来ながら、あんたにそんな事いう資格はない、と更に攻撃に出て、田所にぐの音もあげさせない。そんな時、きまって田所はニヤニヤしてしまうのだが、何だか亭主つきの妾を持ってるような

気がして、バカバカしくもなり「だが、よりにもよって、看板かきの女房になるとはお前も物好きな女だよ」と、一本やり返し、するとまたお里は、負けるものかとばかり「仕事は看板かきなんかやってるけど、うちの人は、閑があれば一生懸命、絵の勉強しているんだよ。やがて、そのうち立派な芸術家に――」といい返したものの、その勉強している絵というのが女を縛った残酷画であり、自分がそのモデルになってるとは、さすがに云えなかった。

日報新聞に進吉は勤め、念願叶って、新聞小説の挿画がかけるようになったが、その頃にはお里と田所の月に二度の逢引は三度、四度、とふえていった。お里は前にもいった通り、素肌をキリキリ緊めつける縄の感触が好きなマゾ性のある女だが、進吉との夫婦行為には身も心も陶酔し切れない物足りなさを感じていた。はっきりいえば進吉はいわゆる包茎短小というやつで、妻を有頂天にはさせ得なかったのである。そこへいくと、田所は女を緊縛して行為に入るという趣味は全くなかったが、肉体がものをいった。何時も二時間から三時間、それも立てつづけに二度三度とくり返し、お里は煽られ捲きこまれ、火柱のように燃えさかって泡まで吹き、完全に絞り尽されてしまう。いわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.